

# 魚と再生

## —中国先史時代の葬送観念—

甲 元 眞 之

はじめに

1. 仰韶文化の彩色紋土器の研究史
2. 人面紋・魚紋土器出土遺跡

3. 魚を随葬する遺跡

4. 伝承に窺える魚

おわりに

### 論文要旨

紀元前4,000年から3,000年の中国では、関中を中心とした地域に赤や黒、もしくは白色で彩色を施した特異な文様の土器が分布していた。そこに描かれた人面紋、魚紋、蛙紋などを巡ってこれまでにトーテム論をはじめとして、さまざまな見解が披露されてきた。そうした種々の意見も具体的な遺跡や出土遺構との関係を重視しての解釈ではなかったために、それらの論の妥当する側面は極めて限られている。ここではそうした特異な彩色紋の施された土器の出土状況を把握することから出発し、魚に焦点をあてることで、葬送儀礼における観念に接近してゆく。

彩色紋土器の出土状況を検討した結果、仰韶文化初期にはこれら特殊なモチーフは、死亡したごく限られた小児か嬰兒を容れる甕棺の蓋の内側に描かれるものであり、集落内部の住居の周辺か住居の内部、あるいは通路に埋葬されることから、子供の魂の復活再生に関係することが窺える。甕棺自体が本来的に子供の魂が回帰するための意味行為であるが、彩色紋を施す土器が盆（椀）形から瓢箪形に変化して、成人の墓に副葬品としての扱いを受けるようになって、それらは共同墓地から切り離されて、集落の内の広場に置かれるか、あるいは共同墓地に埋葬されても、成人女性と関連して検出されるか、特殊な二次葬という葬式に関係することが知られ、共通した観念が存在することが窺われる。

こうした考古学的資料を適確に物語るのは、中国の古典に記載された魚を巡る神話・伝承であり、これらによると魚は復活再生のシンボルと想定されていたことが類推される。早くになくなった子供の魂を再びこの世に回帰させる祈念として、人面紋や魚紋などの特殊な彩色紋を描き、副葬品としての瓢箪形土器にそれが仮託されていった。そして龍信仰の登場とともに、関中地域では魚に対する観念は薄らいでゆき、魚に抱いていた観念や属性の一部は龍に受け継がれて、その歴史的役割を終えていったと想定される。